

喜寿の同期会

櫻田喜貢穂（7組）

覚束ない歩みではありましたが、77歳まで、しっかりと、自分らしく生きてきて、喜寿の同期会に出席することができました。すでに物故者も数多く、生存していても順風満帆とはいかないのが当たり前ですから、喜寿の同期会に出席できたことは、それだけで十分に幸せなことです。そのうえ60年来の同期の仲間たちと無事を確認し合い、語り合い、健闘を称えあい、あるいは励まされ、そして、勇気と元気をもらえたこと。やはりこれが一番うれしいことでした。

幹事の小山田秀士君から「喜寿の会」の感想を書くようにと要請され、7組11名の出席者の顔ぶれ（小川達朗、小山田、小林国雄、櫻田、佐藤徹郎、滝沢博俊、中村宣夫、西澤省悟、宮沢才児、安川荘太郎、山口武）を確認したところ、同期会への出席者は最初からほとんど変わっていないことがわかりました。亡くなった分が減っただけです。同期会は50歳ころから始まったとのことですが、始まった段階で、同期会に出る人と出ない人が決まってしまったようです。

同期会なんぞは日常生活とは関係がないのが普通であるし、人生に不可欠な存在というわけでもないから、出るも出ないも、人それぞれでいいわけですが、最初で決まってしまうということについては興味を覚えました。ひょっとすると、同期会に出てくるのは、懐かしむべき高校時代を過ごした人なのかもしれません。

懐かしむべき高校時代の中心にあるのは、何といても友人たちとの交流でしょう。さらに部活の仲間や、稀には、話の分かる教師やガールフレンドとの交流もあったのでしようが、そうしたものがゼロであるという人が多数いるのも、われらが母校の特徴なのでしようか。

さて、小山田君が設定してくれた二次会ですが、あの面白くない7組に在籍していたのに、みんな懐かしむべき思い出を抱え込んでいたようで、瞬時に見事に高校時代に戻り、悪事や担任の叱責や感動のエピソードやらの思い出に話が弾みました。7組は女性の出席がなく、その点は残念でしたが、女生徒の思い出話も尽きませんでした。思い出話が弾むと、いつの間にか物故者も蘇ってきます。一昨年3月に、私のテニスの盟友池田恵一君が亡くなっています。成績抜群であった澤井繁男君も、個性豊かで反発しあっていた甲田和弘君と小嶋進君も鬼籍に入っています。二次会は同期の物故者を偲ぶ会の様相も呈しつつ、延々と続き、漸く21時過ぎに、再会を約して散会となったのでした。

（次ページに写真）



中央が筆者



7組が登壇、左から小山田、中村、西澤、宮沢、滝沢、山口、小川、小林、安川、佐藤、筆者（櫻田）

(2025年7月28日記)

以上